

SDGs から見える 10年後の会社の未来

民間企業による地方創生とは?地域課題を企業の経営力で解決するSDGsの取り組みが全国で拡がりつつあります。今回の九州教具グループは、正にその先駆けとなる活動成果から「第12回 地域再生大賞」を受賞。SDGs活動から事業利益を上げている点も高く評価され、特別賞「SDGs企業賞」として表彰されました。

シンワラボ 株式会社 代表取締役 加藤 シゲキ

第3回 きゅうしゅうきょうぐ 九州教具グループ 九州教具 株式会社

■代表取締役社長 ふなはし しゅういち 船橋 修一

■本社／長崎県大村市桜馬場1-214-2
TEL 0957-53-1069

■URL <https://q-bic.net>



創業者 本田嘉末



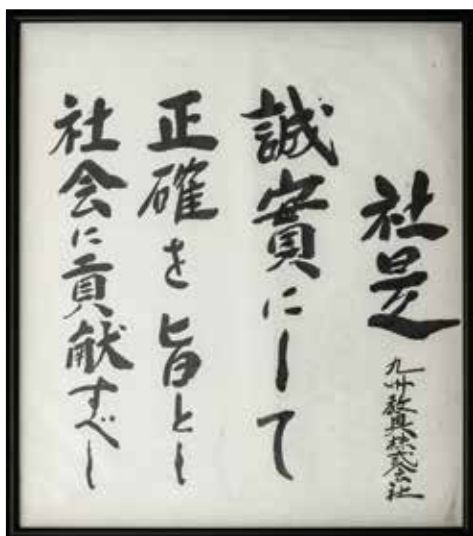
船橋修一社長

会社概要

1946年、創業者・本田嘉末が長崎県大村市中諏訪で本田文具店を開業。1950年、視覚障がい者の読書及び教育環境の改善を目的とする「愛の鉛筆」運動(※1)が福岡盲学校からスタートする。同年、本田文具店は同運動支援のため、九州教具株式会社へ組織変更し、鉛筆の発注、卸売を一手に担う。「愛の鉛筆」運動は約5年間続き、一都二府十五県の全国へ広がった。

戦前・戦中は学校長を務め教育者であった創業者は、社は「誠実にして 正確を旨とし 社会に貢献すべし」を掲げ、事業家として教育に関わり、社会貢献を目指した。以後70年を経て、九州教具株式会社は事業を拡大、長崎県一円から福岡県へも進出する。

2021年8月、各事業部を再編し、各法人化して3社体制となる。九州教具株式会社には、グループ統括機能の事業統括部と事業開発部、そしてウオーターネット長崎(※2)を運営



社是



愛の鉛筆と当時の「運動経過参考資料集」

するウエルネス事業部を置く。そして、ICT（情報通信技術）を核にオフィスソリューション事業を行うQ-bicソリューションズ株式会社と長崎県下に4つのホテルを運営するQ-bicホテルズ株式会社を設立した。Q-bicホテルズ株式会社は、長崎市内でホテルクオーレ長崎駅前・ホテルウイングポート長崎・ホテルベルビュー長崎出島の3ホテル、そして、長崎県波佐見町でホテルブリスヴィラ波佐見を運営する。

（※1）「愛の鉛筆」という刻印入り鉛筆を販売し、その益金を点字図書館の建設資金や点字図書・補聴器などの購入資金に充てるための募金活動。

（※2）ウォーターネット長崎は、本社敷地内の自社プラントで地下水を採水する。乳幼児でも飲めるミネラルバランスに調整。安全安心な飲料水を自社配送で提供している。

「第12回 地域再生大賞」受賞

九州教具グループは、今年1月「第12回地域再生大賞 特別賞SDGs企業賞」を受賞。毎年、全国の地方新聞46社と共同通信社が、地域に活力を与え、魅力を高める活動で

成果を上げた団体を選んでいる。本年は「地域からのSDGs」がテーマであり、九州教具グループは、地域の持続的発展への取り組みが高く評価された。

地元新聞社の推薦に加え、最終選考には現地調査が行われ、東京から選考委員が九州教具グループを訪問し、審査が行われた。「SDGs活動がボランティアではなく、事業利益に繋がっていることが全国でも珍しく、大変素晴らしい」と全国で唯一「SDGs企業賞」が授与された。



「第12回 地域再生大賞」表彰状を持つ船橋社長

CSV経営と SDGs活動について

船橋社長が経営の根幹に据えているのは、CSV(※3)(共有価値の創出)である。2011年に発表されたCSV経営理論。創業以来の社は社会に貢献すべし¹の正しさが学問的にも証明される形となった。その後2015年、国連でSDGs宣言が行われ、持続可能な社会の実現へ向け、様々な課題解決への取り組みが世界中で一気に広がる。

九州教員グループでは、CSV経営の一環としてSDGsを取り入れ、活動を開始する。また船橋社長は「SDGsは、資本主義や共産主義に続く、新しいイデオロギーの誕生であり、世界的なパラダイムシフト(※4)が起こっている」と捉える。現代は時代の大きな転換期。過去の成功体験や価値観を思い切って捨てなければ、決して乗り越えられない。「SDGsもDXと同じ。DXが一向に進まないのも、SDGsが分からないのも同じ理由からだ」と船橋社長は考えている。

(※3) CSV経営(Creating Shared Value)経営戦略論の大家マイケル・ポーターとマーク・クラマーが発表。CSVは社会貢献と利益追求を両立。事業経営から社会課題を解決し、利潤を追求する戦略的な経営理論となっている。

(※4) パラダイムシフトとは、その時代や分野において当然のことと考えられていた認識や思想、社会全体の価値観などが革命的・劇的に変化すること。



企業・教育・ICTの普及支援 生産性の高い職場環境の実現

「SDGsとDXは一体のものでもある」ICT(情報通信技術)の活用等、DXを進めることにより、SDGs活動・様々な社会課題が解決しやすくなると船橋社長は自身の経験から語る。米国シリコンバレーではグーグル本社を訪ね、またIT先進国エストニアも社員と視察。キューバへも社員を派遣する等、最先端のDXによる社会進化を目の当たりにしてきた。そうした世界的なDX進化の背景には、生まれながらデジタル機器に親しみ、上の世代とは情報入手・学び方から考え方・価値観まで、全く異なるZ世代(※5)の存在がある。彼らの

存在感が大きくなるにつれ、社会全体が世代交代の時を迎えつつあると船橋社長は実感する。

Qubicソリューションズ株式会社は、企業や学校のICTソリューション事業を展開する。中でも長崎県川棚町、東彼杵町における教育ICTの普及事業は、全国的にも高く評価されており、昨今のコロナ禍によるリモート授業などでも威力を発揮している。(川棚町は、2020年公立学校情報化ランキングで全国約1,700自治体中37位)

船橋社長は、学校や教育委員会で講演を依頼される機会が多く、Z世代と触れ合いながら、彼らのSDGsに対する価値観やデジタル感覚を直接知る、数少ない経営者でもある。

また自社内でもICT・DX推進として会議の全面的オンライン化へ踏み切っている。結果、時間効率・生産性の向上だけでなく、現場ホテルスタッフから社長への事業提案が活発化。社員のSDGs活動提案から事業サービスが生まれるサイクルが出来上がっている。

(※5) Z世代とは、生れながらのデジタルネイティブである初の世代。概ね90年代半ばから、2010年代はじめに生まれた世代。現在年齢は、小学生高学年から20代半ばの世代。



ダイバーシティと平等性の促進

九州教具グループでは、女性の活躍推進（特に子供がいる社員の支援制度等）や外国人の採用を積極的に推進している。育休明けの職場復帰プログラムの導入、各人の状況に応じた時短勤務や時間単位の有休制度の導入等、社員が働きやすい職場環境づくりを行う。

また採用時には、性別・国籍等の要件は入れず、能力により可否を判定。入社後も公正・公平な人事



上.オンライン会議風景/下.九州教具グループで活躍する外国人社員

評価・昇格を行う為、国籍や性別・年齢に関係なく、能力・成果に基づいた昇格試験制度を実施している。（直近4年の採用実績、女性50%、外国人18%）
2022年4月現在）



イノシシ肉料理の提供

ホテルレストランでの食品ロス削減

コロナ禍では、観光やビジネスの宿泊客が激減した。ホテル事業にとって完全な逆風下、空いた時間を「福音」と捉え、現場のホテルスタッフから新サービスが生まれている。「どんどん妄想してくれ。新しいアイデアを提案してくれ」と日頃より発破をかける船橋社長が驚くほど、斬新なプランがオンラインで次々と提案された。

波佐見町では、野生のイノシシによる農耕地の獣害被害が深刻化。年間約800頭も捕獲されるイノシシを夕食のメイン食材へ、ホテルブリスヴィラ波佐見からの提案だった。ジビエ料理として地域の活性化にも貢献、また地元食材の使用で輸入食材（牛肉・豚肉）に比べ、VW（※6）の削減にもつながると、SDGs思考に基づいたアイデアだった。「レストラン



ホテルベルビュー長崎出島の朝食



イノシシ肉のハンバーグ(波佐見プレート)

新メニュー提案として、生け捕られたイノシシが全面に写るスライド資料に、まずビックリした」と笑いながら船橋社長はとても満足げ。

他にも、ホテルベルビュー長崎出島から、食品ロスの削減を念頭に、朝食リニューアルの新メニューが提案された。朝食を楽しみに来ていただけのメニューへ全面的に見直し、値段は500円アップする。この大胆な発想にも驚いたが、船橋社長はその場でOKを出した。

いずれもお客様や予約サイトから大変好評を得ており、ホテルスタッフがオンライン化で社長へ直接、提案したアイデアから成功体験が生まれている。社員によるSDGs活動から新しいサービスを生み出し、事業化される企業風土へとつながっている。

(※6)VWとはバーチャル・ウォーターの略。食料や畜産物を輸入する消費国が自国でそれらを生育する時に必要な水の量を推定。日本の年間VW輸入量は約800億m。間接的な水資源の枯渇要因ともなっている。



「ピース折り鶴プロジェクト」による平和推進の活動 「折鶴焼」によるSDGsバッジの制作

被爆地・長崎に宿泊されたお客様へ、長崎らしい思い出と平和について考えるきっかけをとホテルスタッフ

が発案。2006年スタートしたのが「ピース折り鶴プロジェクト」。九州教具グループのホテルに宿泊されたお客様に鶴を折っていただき、毎年、8月9日（長崎原爆の日）、長崎原爆資料館へ献納する。同資料館には、日本全国・世界中から平和への願いを乗せた折り鶴が寄せられる。その量は毎年数トンにも上り、民間の倉庫で保管されている。

その折り鶴を生まれ変わらせたのが「折鶴焼」SDGsバッジ。九州教具グループが発案し、一般社団法人金富良舎^{こんぶらしゃ}が製造販売を行っている。金富良舎は、波佐見の若手が集い、波佐見発信の新しい文化や価値観を創り出す事業を行っている。

九州教具グループからSDGsバッジ制作の依頼を受けた金富良舎は「折鶴焼で作ってはどうか？」という提案を行った。折鶴焼は原爆資料館や平和公園に寄贈された折り鶴を燃やし、その灰を釉薬に混ぜて焼成する技法。不純物である灰はムラや斑点を発生させる。これら売り物にできないキズを折鶴焼は良とする。このキズこそ「平和と公正をすべての人にSDGs16への願いがこもった証だからだ。発売から約2年、このバッジは企業・団体・行政など長崎県内様々な場所で目にするようになっていく。



折り鶴とSDGsバッジ



折鶴焼 釉薬掛けの様子



長崎県波佐見町の地方創生

波佐見町では、以前から地域振興の起点となるホテルの招致を行っていた。JR駅もなく、有名な観光地でもない。普通なら進出しな場所だが、船橋社長はホテルの建設を決める。2015年、ホテルブリスヴィラ波佐見をオープンさせた。

船橋社長は、九州教具株式会社へ入社した直後から、長崎県全域で飛び込み訪問を行う。「波佐見では家族の誰かが陶磁器の製造に従事している。波佐見焼に囲まれて生活している。だからその暮らしぶりにも、非常にセンスの良さを感じていた」波佐見で暮らす地元の人々と触れ合った原体験がホテル進出の決め手となった。

今でこそ、波佐見焼は「現代的なセンスある陶器」として若者にも人気だが、デザインから全工程を外部に委託することなく、地元の職人が分業している。最近では、町に若者の姿が目立つようになった。陶芸を学ぶ美大生、地方創生を研究する大学生、そしてオフィスに促わ

れない新しい働き方を実践する若者たち。

船橋社長がホテル建設地を波佐見温泉「湯治楼」まで徒歩1分の場所に決めたのは、新たな時代における働き方を想定した「仕事と湯とリゾート」というコンセプトがあったからだ。クリエイティブで自由なワーキングスタイルと、温泉をはじめとするゆとりあるリゾートの融合。ホテルブリスヴィラ波佐見はそういった滞在型ホテルであり、今注目されるワーケーションを先取りしたホテルではないだろうか。

先述の学校教育現場でのICT普及、イノシシ肉料理による地産地消、折鶴焼SDGsバッジ制作、そして滞在型ホテルでは外部から人を呼び込み地域振興の拠点となっている。全てのSDGs活動が繋がっており、点から線へ、そして面へと広がっている。まさに、SDGs実践による地方創生モデル事例と言える。



ホテルブリスヴィラ波佐見 外観

■ 取材ノート

シンワラボ 株式会社 代表取締役 加藤 シゲキ

経済産業省 九州経済産業局 SDGsパートナー機関
健康経営エキスパートアドバイザー

<https://shinwalab.jp> mail:shigeki.kato@shinwalab.jp



九州では熊本県に続き、長崎県がSDGsを実践する企業・団体を認定する制度を新設。長崎県SDGs登録の第1期は244事業者となった。(熊本県は、第1・2期の2回で、1,012事業者が登録)九州教具グループの船橋社長は、長崎経済同友会のSDGs委員長を務め、長崎県全体のSDGs推進をリードする立場でもある。今回のインタビューでは「SDGs×DXがもたらす未来の社会像」に関して、バーチャル空間の活用・メタバース技術等、様々なお話を伺った。紙面の都合で全容を描き切れておらず、今後の連載の中でお伝えして行きたい。